

著者	信時裕子
タイトル	海道東征—母校における75年目の再演とその楽譜
掲載書(誌)等	交声曲 海道東征 [プログラム]
発行所	
年月(日)	2016.10.03
備考	主催:産経新聞社 会場:ザ・シンフォニーホール(大阪)

URL http://www.nobutoki.sakuraweb.com/mu4vgahev-123/#_123

注： PDF は著者最終版

海道東征—母校における75年目の再演とその楽譜

信時裕子（音楽学）

「海道東征」を初演した東京音楽学校は、祖父信時潔の母校で、現・東京藝術大学音楽学部である。2015年11月28日、すなわち産経新聞社主催「海道東征」大阪公演の翌週、その母校で、初演から75年目の再演があった。信時の「没後50周年記念演奏会」、ナクソスの「日本作曲家選輯 東京藝術大学編」第二弾としてのCD録音（NYCC-27300）、そして附属図書館の信時潔文庫資料整理プロジェクトの成果発表を兼ねて、演奏会、シンポジウム、関連資料展示などが同時期に開催された。

私は信時文庫資料整理プロジェクトの一員として、自筆譜、出版譜、蔵書などの整理を担当している。^注「海道東征」再演は、プロジェクト開始時には決まっていなかったが、思いがけず藝大あげての企画となり、私も参画した。信時が直接教えた生徒は既に大学を去り、いまや孫弟子、曾孫弟子が活躍する時代だが、「信時先生の作品は、藝大として、やっておかなければ」という、母校に受け継がれてきた信時に対する静かな信頼、あるいは尊敬、そしてまた毅然とした態度、というようなものに支えられての公演だったと、いま改めて思い返している。

さて、その藝大「海道東征」公演では、資料整理の成果を演奏用楽譜に反映させることができた。フルスコア初版（共益商社書店 1943）のレンタル用復刻版を、自筆スコア（信時文庫蔵）、初演時のスコア（妻ミイによる筆写譜。原本：岩手大学図書館蔵）、更に必要な場合はスケッチやヴォーカル・スコアの筆写譜など（信時文庫蔵）の同じ箇所を確認し、間違いの理由がわかれば訂正した。演奏時間約55分、スコア全144ページ中、疑問点として挙がったのは、作業用リストで確認できるものに限れば420件。自筆譜を確認するだけで

簡単に判明したものが多かったが、喧々諤々討論して結論に「至る」ことも、「至れない」こともあった。資料では明らかにできない箇所、演奏上必要な訂正は、指揮者・湯浅卓雄教授が判断した。演奏の都度指揮者や演奏者が判断すべきことで、楽譜まで直す必要はない、と判断された箇所もある。もし作曲者本人に尋ねることができれば「あ、それは間違いだ、直しておいて」の一言で終わりそうなことでも、なにか深いワケが、こだわりが、あったのではないか、特別な効果を狙ったのではないか、などと考え始めると気軽には直せない。最終的に、はっきり数えられる訂正は268件（テヌートやアクセント記号の削除や、いわゆる親切臨時記号の加除を除く）に上った。

藝大公演では、指揮者が演奏者に指示したが、その後それらを理由とともに訂正一覧にまとめ、レンタル用スコアに訂正を書き入れ、パート譜を直して再度印刷するには、更に半年以上の時間を費やした。訂正後のスコア・パート譜を使用しての演奏は、本日が最初である。

かなりの時間を費やしたが、「校訂版」と名乗れるものではない。諸大家の名だたる全集版のように、一小節ごとに、全パート分、各種資料にあたって比較検討したものではなく、指摘があった箇所を見直したに過ぎない。「校訂版」への道は遠い。

アカデミア・ミュージックの英断で、ヴォーカル・スコア復刻版の刊行、レンタル用フルスコアの復刻とパート譜作成までは実現し、だからこそ近年の再演、CD化が可能になった。ここまで来れば本格的な「校訂版」に取り組む予算を確保して、アカデミアさんにもう一度お願いしたいところだが、残念ながら確保の目途は一向に立っていない。

^注文庫資料目録は、来年度にはWEB公開予定。